

ARTLET

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第51号

FEATURE ARTICLES

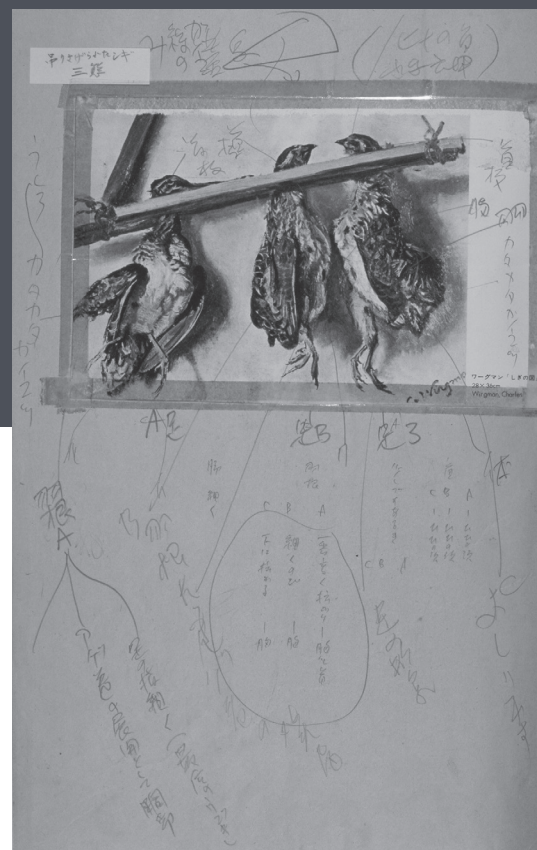
慶應義塾大学アート・センター アーカイヴ・コレクション

土方巽／ノグチ・ルーム／田邊光郎／瀧口修造／油井正一／
慶應義塾の建築／西脇順三郎／渋谷清／草月アートセンター／
峯村敏明／飯田善國／中嶋興／VIC (Video Information Center)

「アーカイヴ——驚異の部屋、あるいは編集の驚異」
山腰 亮介

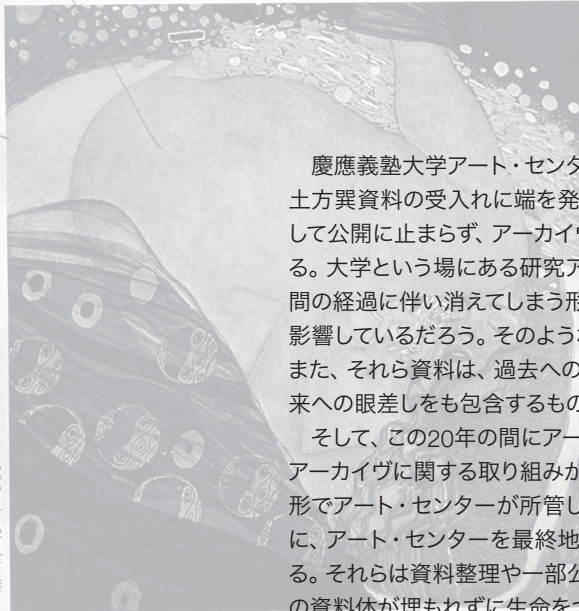
INFORMATION

活動報告



舞踏譜「鳥一鶏」より

慶應義塾大学アート・センター アーカイヴ・コレクション



慶應義塾大学アート・センターがアーカイヴ活動に取り組んでから2018年で20年を迎えた。土方巽資料の受入れに端を発するアート・センターのアーカイヴは、資料の受入れや整理、そして公開に止まらず、アーカイヴそのものについての研究を伴っていたことにも大きな特徴がある。大学という場にある研究アーカイヴであること、また、舞踏（パフォーマンス）のように、時間の経過に伴い消えてしまう形態の芸術を対象としてアーカイヴをスタートさせたことも大きく影響しているだろう。そのような芸術作品は資料を通してしかアプローチすることができない。また、それら資料は、過去への眼差しをもたらすだけではなく、新しく何かを開始するための未来への眼差しをも包含するものである。

そして、この20年の間にアーカイヴを取り巻く状況は大きく変わった。現在では至るところでアーカイヴに関する取り組みが見られるようになった。ここに紹介するのは、現時点で、様々な形でアート・センターが所管している資料体である。近年、我々が取り組んでいる活動の一つに、アート・センターを最終地と想定しない資料体の一時受入れと研究、プロセッシングがある。それらは資料整理や一部公開などを通して、いずれ、より相応しい場所に到達するまで、その資料体が埋もれずに生命をつなぐための活動と言えるだろう。

※下記のリストに示された各コレクションのステイタスは2019年3月時点のものであり、今後変更される可能性がある。

名 称	内容説明	ステータス
土方巽	舞踏の創始者、土方巽(1928-1986)とその稽古場アスベスト館にまつわる資料体、および関連して高井富士・池宮信夫・石井満隆・辻村和子・副島輝人・吉本隆明に関する資料体	寄贈・寄託 および預託
ノグチ・ルーム	慶應義塾大学三田キャンパス第二研究室棟談話室「新萬來舎」(のちにノグチ・ルームと呼称)に関する研究資料体	機関作成
田邊光郎／『役者』	月刊の歌舞伎雑誌『役者』の発行人・編集者、田邊光郎(1923-1995)旧蔵の編集資料からなる資料体	寄贈
瀧口修造	日本におけるシュルレアリスムを牽引した詩人・美術批評家、瀧口修造(1903-1979)の資料体	寄贈
油井正一	ジャズ評論界の草分けとして活躍した、ジャズ評論家、油井正一(1918-1998)のジャズ・放送文化関連資料体	寄託
慶應義塾の建築	ノグチ・ルーム・アーカイヴのブランチ・プロジェクト。慶應義塾の建築の記録化、資料整備および建築に関する教育普及活動を実施。図面のデジタル・データ、建築撮影写真、塾内建築に関わる二次資料によってなる資料体	機関作成
西脇順三郎	西脇順三郎研究の第一人者、新倉俊一氏が収集した西脇順三郎(1894-1982)の草稿、研究ノート、出版物(稀覯書、研究書)からなる資料体	寄贈
渋井清／春画研究	浮世絵研究者渋井清(1899-1992)が江戸期(17~19世紀)の艶本研究のために作成した、作品カードからなる資料体	寄贈
草月アートセンター	勅使河原宏をリーダーとして設立された草月アートセンター(1958-1971)が発行した印刷物を中心とする資料体	寄託
峯村敏明	もの派 美術批評家、峯村敏明(1936-)旧蔵の「もの派」に関する書簡、写真、印刷物からなる資料体	寄託
	東京ビエンナーレ 峯村敏明旧蔵の「東京ビエンナーレ」に関する写真からなる資料体	寄託
飯田善國	彫刻家、飯田善國(1923-2006)に関する、書簡、写真、印刷物を中心とする資料体	寄託
中嶋興	映像作家、中嶋興(1941-)の写真を中心とする資料体	寄託
VIC (Video Information Center)	ビデオを用いた活動グループ、VIC (Video Information Center 1972- 代表: 手塚一郎)のビデオテープおよび写真、紙資料からなる資料体	寄託

当アーカイヴが所管するコレクションの各ステイタスは以下の四種である。

寄贈: 所有権を有するコレクション

寄託: 所有権はないが、所管義務のあるコレクション
預託: 所有権も所管義務もないが、諸般の事情により一時的に預かっているコレクション

機関作成: 慶應義塾大学または慶應義塾大学アート・センターによって作成された資料を中心としたコレクション

※総件数について：各コレクションの内訳の単位が異なる場合、総数においては全ての単位を一律に「件」と数えた。「件」はその内に複数のアイテムを含んでいる場合に用いており、「枚」や「冊」はアイテムが1つであることを示している。

土方巽アーカイヴ【寄贈・寄託および預託】

1998年4月に実験的なアーカイヴとして、かつアート・アーカイヴのパイオニアとして設置。写真や動画（紙焼き、ネガ、パネル、フィルム、ビデオ、DVD）、録音や音声（オープンリール、カセットテープ）、舞踏譜（手稿）、原稿やメモ類（手稿）、書簡類、カタログやパンフレット、ポスターやフライヤーなどのエフェメラ（一過性印刷物）、衣裳や舞台美術、美術作品の一次資料に加えて、雑誌や書籍、新聞、そしてデジタルデータなど、ダンスだけではなくジャンルを超えた資料体。アスベスト館から寄託された資料に、アート・センターで作成された研究資料、国内外の舞踏研究の論文などが加わった、世界有数のダンス資料のコレクション。

①ダンス・舞踏資料：池宮信夫資料、石井満隆資料、高井富子資料、辻村和子資料など、1950年代以降のダンス・舞踏資料として新たに収集・整理中のコレクション。日本のダンスおよび舞踏研究に

おいて不可欠の資料コレクション。

②フリージャズ資料：フリージャズの評論と制作にあたった副島輝人のコレクション。日本のフリージャズの貴重な音源やメールス・ジャズ祭のオリジナル映像など、フリージャズ研究のための無二の資料コレクション。土方巽資料は、写真：11,052件、動画：211件、音声：364件、舞踏譜：スクラップブック16バインダーおよびスクリプト・シート255組（1,300枚）、原稿：15バインダー、書簡：2,050件、エフェメラ：329件、衣裳：4件、舞台美術：20件、雑誌：836件、書籍：1,119件、新聞（記事のみ登録）：296件、総計：16,326件（単位が系列ごとに異なるが全てを1件として数えた。）

また、高井資料：63件、池宮資料：1,208件、石井資料：1,470件、副島資料：6,203件、辻村資料：232件を所管。〔記：森下隆（慶應義塾大学アート・センター所員）〕



土方巽 撮影：深瀬昌久



赤ドレス（1968年）

ノグチ・ルーム・コレクション【機関作成】

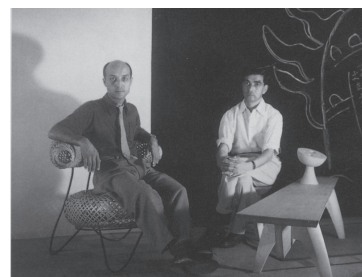
慶應義塾大学三田キャンパス第二研究室（谷口吉郎設計、1951年竣工、2003年解体）の談話室として計画され、イサム・ノグチがそのデザインを担当し、のちにノグチ・ルームと呼称される新萬來舎（付属庭園、ノグチによる3点の彫刻《若い人》《無》《学生》を含む）に関する研究資料体である。また、2008年度よりブランチとして「慶應義塾の建築」プロジェクトを立ち上げている（別項参照）。

1998年に設置され、ノグチ・ルームに関する写真資料（新規撮影を含む）や図面データ（実物は慶應義塾大学管財部所蔵）などを中心に谷口吉郎、イサム・ノグチの関連文献も収集してきた。その後第二研究室が解体されるに及んで、その際の記録も資料として保存しているが、まだ未整理の部分も多

く、今後の活動の課題となっている。

現在は形を変えて移設されている旧ノグチ・ルームに対する保存修復や活用という実地的な活動とも深く関わりながらアーカイヴを展開している点が特徴である。特に修復に関してはその詳細な記録も資料として集積されている。

書類：20バインダーおよび5ボックス、ビデオ・テープ：15本、写真：189件、書誌：287件、総計：516件を所管（単位が系列ごとに異なるが全てを1件として数えた。）。〔記：渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授／キュレーター）〕



左：イサム・ノグチ 右：谷口吉郎
画像出典：杉山真紀子編『萬來舎』（鹿島出版会、2006）

田邊光郎／『役者』コレクション【寄贈】

『役者』は、第二次世界大戦の終戦後、1947年から1949年まで18号にわたり発行された月刊の歌舞伎雑誌である。本コレクションは、『役者』の発行人・編集者であり、私財を投じて発行を支えた田邊光郎（1923-1995）旧蔵の編集資料からなる。

編集者は1～10号を齋藤竹治が、11～13号を田邊光郎（川口子太郎）、14～18号を川口子太郎がつとめた。歌舞伎界の単なるファン誌としてではなく、創造的で学究的な雑誌として編集された『役者』には、戸板康二、池田彌三郎、武智鐵二などの評論家・学者のみならず、歌舞伎役者や舞台美術を手がけた人々が文章を寄せている。

1999年に田邊光郎のご遺族からの寄贈を受け整理された資料は、『役者』の雑誌原本、原稿（自筆原稿や手書き台本）、手紙、事務書類、画稿、

写真（舞台写真、スナップ写真）、プロマイド／絵はがき（劇場、映画）、書籍など、1,200件弱である。

雑誌編集のために準備された自筆原稿、画稿や写真の中には、本誌に掲載されなかった資料も含まれ、雑誌をとりまく時代の状況、発行を支えた発行人はじめ編集にあたった人、執筆者、取材に応じた人びと、このような雑誌を待ち望み熱心に読んだファンなどの読者の反応などが読みとれる豊かな資料となっている。

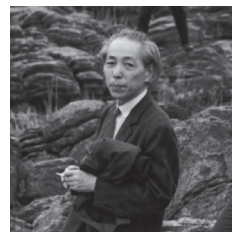
※本テキストは「田邊コレクション／『役者』資料整備プロジェクト」（1999年、楠原偕子編、慶應義塾大学アート・センター発行）の記述に基づく。〔記：本間友（慶應義塾大学アート・センター所員）〕



瀧口修造コレクション【寄贈】

詩人、美術批評家、造形作家である瀧口修造(1903-1979)の1936-1979年にわたる資料体。瀧口は、1920年代より実験的詩作を開始し、1950年代は美術評論を行うとともに展覧会を企画した。1960年代は評論から徐々に撤退し、制作を行うようになった。戦後の美術史が形成される上で中心的役割を果たした人物である。2001年、瀧口のご遺族鈴木陽氏からの資料寄贈を機に開設。中心となる資料は、書簡、写真、催事印刷物、草稿、手づくり本(通称)およびその材料、書籍等(書簡: 3,538件、草稿: 13ボックス、手帖: 87件、雑資料:

279件、写真: 623件、手づくり本およびその材料: 11ボックス、書籍: 773件、催事印刷物: 1,323件)、総計: 6,609件(単位が系列ごとに異なるが、全て1件と数えた)を所管。系列ごとに整理の深度が異なり、件数が明らかになっているもの以外(ボックス)の整理を進めて行きたいと考えている。残された物品の中には、通常ならゴミとして廃棄されてしまうであろうものまで含まれており、非常に繊細な手つきによって、それらの様々な再配置を繰り返し試みていたことが書斎写真からも窺われる。戦後の芸術史を見直す上で、重要な資料体である。[記: 久保仁志(慶應義塾大学アート・センター所員)]

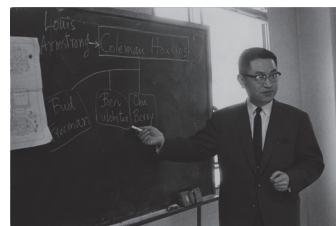


油井正一コレクション【寄託】

日本のジャズ評論の草分けである油井正一(1918-1998)は、1930年代後半に執筆およびDJ活動を開始、以後1998年に没する直前まで、日本のジャズに関する言説をつねにリードし続けた。20世紀のジャズは、世界的な社会構造とメディアの状況の激変とともに目まぐるしくその姿を変えつつ、領域を超えて多方面に影響を及ぼしている。油井のジャズ評論に関わる資料は、そんなジャズ文化を日本がどのように受け止めていったかを記録した、重要なドキュメントでもある。

慶應義塾大学アート・センターでは、慶應義塾

大学法学部の卒業生でもある油井正一の資料を2003年にご遺族から寄託され、資料の調査整理とアーカイブ構築を進めている。資料は総数約10,000件におよび、書籍(図書、雑誌、印刷物)、文字資料(ファイル、原稿、メモ、ノートなど)、音声資料(CD、レコード、カセットテープなど)、映像資料(ビデオなど)を含む。とくに、1960年代から1970年代にかけて、油井がラジオのジャズ講座のために準備した研究ノート、雑誌、エアチェック音源、そして来日したアーティストへのインタビューなどは、ジャズに留まらず、日本の放送文化を考える上でも貴重な資料となっている。[記: 本間]



慶應義塾の建築【機関作成】

「慶應義塾の建築プロジェクト」は「ノグチ・ルーム・アーカイヴ」のランチとして2008年に立ち上がった。ノグチ・ルームをはじめ、貴重な建築物が解体される状況を前に、建築物の保存や継承をはかるべく、建築図面のデジタル化や写真撮影を通じたアーカイヴィングを開始した。さらに、物理的な資料だけでなく、建築を利用する人々の思いや、建築自体が経た時間の流れを含む「建築の記憶」そのものをアーカイヴ化する「ユーザー・マインドの建築アーカイヴ」を志向する点に大きな特徴がある。

建築物の継承には、その価値が広く認識されることが重要である。それゆえ、本プロジェクトはアウ

トリーチにも力を入れており、ガイドツアーやシンポジウムなどを定期的で開催するだけでなく、図面や建築部材を出品する展覧会も開催している。その意味で、本プロジェクトは、建築物への人々の意識を「ひらく」ことを目的とする動的なアーカイヴでもあるといえよう。

また、「大学の建築」という視点から、学外にも写真撮影など一部の活動を展開している。特に貴重な建築物を有する他大学との連携も見据えており、「大学の建築」という枠組形成の中心としての役割が期待されている。[記: 新倉慎右(Bunkamuraザ・ミュージアム)]



西脇順三郎コレクション【寄贈】

新潟県生まれの西脇順三郎(1894-1982)は日本の近代詩、詩論、批評を軸に活動した詩人で英文学者である。慶應義塾大学で教鞭を取るかわり、戦前からシュルレアリスム運動に身を置き、瀧口修造らに影響を与えた。2012年、西脇の門弟で、西脇研究の第一人者である新倉俊一氏(明治学院大学名誉教授)より資料を受贈し、西脇アーカイヴを開設した。総件数およそ800件からなる資料群は、自筆原稿: 70件、ノート: 78冊、旧蔵の書籍や雑誌: 550冊、書簡: 34件、音声テープ: 10本などから構成される。とりわけノートや原稿は、西脇の思考の跡がうかがえる貴重な資料であり、これまで

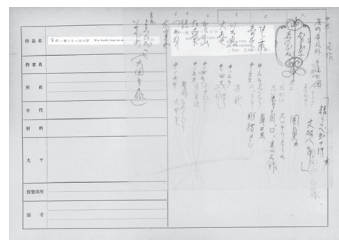
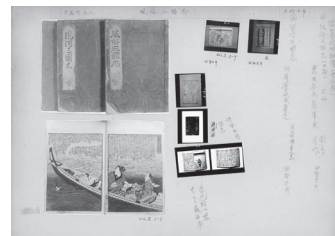
にも展覧会への貸し出しや研究者による調査に活用されている。音声テープは劣化を防ぐため、デジタル化されている。西脇旧蔵の書籍は戦前に出版された初版本21冊を含み、雑誌は西脇が執筆した記事や詩作品等が掲載されているものである。1922年渡英した西脇は英国モダニズム詩から大きな影響を受けたが、関連する英文書籍も所蔵されている。他者による評論や研究など二次資料も順次加えられており、詩や詩論研究および日本のシュルレアリスム研究にとって豊かなリソースを備えている。[記: 森山緑(慶應義塾大学アート・センター所員)]



渋井清／春画研究コレクション【寄贈】

本コレクションは2009年に預託され、2012年に寄贈された資料により運用されるもので、塾員で長年慶大講師として、研究者兼収集家でもあった故・渋井清が作成した江戸時代の春画研究資料から成る。大正から昭和期に数々の著作を残した渋井は、在野の立場から長年にわたり美術史研究に尽力し、昭和34年に文学博士号を取得している。その著作は多く、代表的なものに『元禄古版畫集英』（古版畫研究學會、昭和元年）、『ウキヨエ内史』第1輯・第2輯（大鳳閣書房、昭和7・8年）などがあり、往時の浮世絵研究ではリーディング・スカラーのひとりである。なお、渋井は塾長代理だった高橋

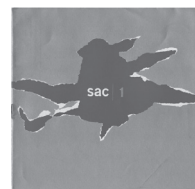
誠一郎や西脇順三郎など多くの慶大関係者とも親しい交遊があり、戦後芸術をカテゴリーとするアート・センターでは異色ながらも、縁続きのアーカイヴということになる。渋井の残した江戸期の艶本資料は、著述の際に作成、参照した個人的な研究資料である。資料の大半はB4ノビの作品調査カードで、合計14箱に収められているが、内訳は作品調査カード898組（貼付写真ほか、メモ書き等挿入紙葉）である。このうち、作品を撮影した写真は現在原本の所在が不明なものも含まれており、関連の研究へ裨益するところ大であると考えられる。国の外部資金を得てデジタル化作業を実施後、申請により公開を開始し、現在に至っている。〔記：内藤正人（慶應義塾大学アート・センター所長）〕



草月アートセンター・コレクション【寄託】

草月アートセンター（1958-1971）の印刷物を中心とした資料体。草月アートセンターは勅使河原宏をディレクターとして旧草月会館において設立された組織である。その機関誌『SAC』の創刊号（1960）で「『総合化』という現代芸術すべてのジャンルに共通した課題がはっきりと打ち出されている」（安部公房）と語られているように、単一のメディア（ジャンル）を掘り下げるだけでなく、単一メディアの分解および諸メディアの結合という「インターメディア」性を模索したイベントが多数行われてい

た。主要なシリーズ・イベントとしては「草月ミュージック・イン」「草月コンテンツラリー・シリーズ」「草月シネマテーク」などが挙げられ、およそ290件に及ぶイベントが行われた。2008年の預託を経て、2013年、一般財団法人草月会から印刷物を主とした資料を寄託されたことを機に開設。中心となるのはイベントに際し発行されていた各種印刷物（290件）である。その他、「EXPOSE1968」関連写真（5バインダー）、関連記事（6バインダー）、その他書類（2ボックス）、総計：303件を所管。60年代の芸術に起きた様々な横断的試みを知る上で重要な資料である。今後は書類を中心に整理を進めたい。〔記：久保〕



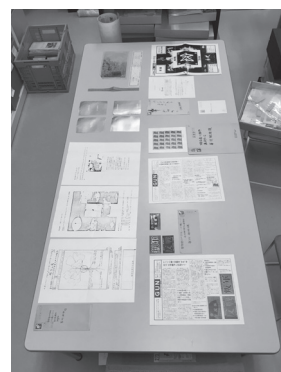
峯村敏明コレクション【寄託】

美術批評家・峯村敏明（1936-）の1960年代後半から1980年代にいたる資料体。峯村は「東京ビエンナーレ 1970」の組織・運営を行い、毎日新聞を退社した1971年より美術批評を本格的に開始する。「もの派」の活動に着目し多くを論じるとともに、日本におけるその後の美術の動向を「もの派とポストもの派の展開 1969年以降の日本の美術」展（1987）などを通じて総覧している。「東京ビエンナーレ 1970」、「もの派」、日本のコンセプチュアル・アート等に関する資料群を所管。2006年より預託、2015年に寄託。以下、主な二つのコレクションについて紹介する。

「東京ビエンナーレ 1970」コレクション
第10回日本国際美術展「人間と物質」（1970年5月）に関する写真を中心とした資料体。この展覧

会は、同時代における海外の文脈と日本の文脈を「人間と物質」というテーマによって日本において接続した重要な企画である。ほとんどが一過性の形体を有する作品群であり、記録によってしかそれらにアプローチすることができないということが当時の美術作品の潮流を見事に表現している。会場写真を中心とした写真：409枚、印刷物：34件、新聞・雑誌記事等のクリッピング：136件、総計：579件を所管。

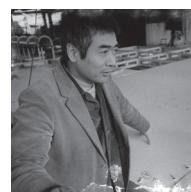
「もの派」コレクション
「もの派」に関する写真と峯村の研究資料を中心とした資料体。「もの派」は、1968年に関根伸夫が発表した《位相・大地》を李禹煥が評価し、理論付けを行ったことに端を発する動向である。物が比較的加工されていない状態で設置されているように見えるのが特徴である。写真：659件、書類：254件、クリッピング：51件、印刷物：169件、総計：1,133件を所管。〔記：久保〕



飯田善國コレクション【寄託】

彫刻家・詩人、飯田善國（1923-2006）の1920年代から2006年にいたる写真を中心とした資料体。飯田は慶應義塾大学にて国文学と美学を学んだ後、東京藝術大学美術学部油絵科の梅原龍三郎教室に学ぶ。「製作者懇談会」を結成し、絵画制作を行った後、ローマ留学中にヘンリー・ムーアの彫刻と出会ったことを契機とし、彫刻の制作を開始する。運営委員として「国際鉄銅彫刻シンポジウ

ム：1969-1970」に参加。1972年、西脇順三郎の詩に絵を組み合わせ「Chromatopoiema」を制作。2012年より預託、2017年より寄託。「国際鉄銅彫刻シンポジウム：1969-1970」をはじめとする写真：611件、書簡：44件、書類：36件、印刷物：4件、雑資料：2件、音響映像資料：1件、未整理のボックス：9件、総計：707件（ボックスは内容物未整理のため1箱で1件と数えた）。未整理のボックスの中身はおおよそ、写真・書簡・印刷物等である。今後はこれらの整理を進めたい。〔記：久保〕



中嶋興コレクション【寄託】

中嶋興(1941-)の1961年から2016年にいたる写真を中心とした資料体。中嶋は、1960年代後半より映像・インスタレーション・芸術運動・記録などの多様な活動を行っている。特に《生物学的サイクル》(1971-)と《MY LIFE》(1976-)等は、数度発表されているが、現在にいたるまで再編され続けており、中嶋の制作に対する特異な姿勢を表現する未完の映像作品である。1970年より「ビデオアース東京」というグループを組織し、CATVを基軸としたビデオ・コミュニケーションをグローバルに展開した。活動当初より写真を撮り続けており、松澤有の「ψ(プサイ)の部屋」の記録写真や「もの派」作品の記録写真など、記録されなければ消えてしまう美術史において重要な一過性の作品等の記録、また

銭湯や街の光景などの文化風俗の記録を膨大に行う。本人より2014年に預託、2018年より寄託。写真：約32,000枚(フィルム・スリーブの場合は一コマを一枚とカウント)、クリッピング：3件、映像：3件を所管、印刷物：5件、総計：32,011件を所管。「ψの部屋」および「もの派」作品の記録写真がデジタル化され、閲覧可能である。今後は未整理の写真群の整理およびデジタル化を進めたい。[記：久保]



VICコレクション【寄託】

VIC(ビデオインフォメーションセンター 1972-)の1972年から現在にいたるビデオ・テープを中心とした資料体。VICは1972年、ICU小劇場という演劇サークルに所属していたICUの学生を主要メンバーとして組織されたグループである。当時、学生運動がもたらした状況の一つに、コミュニケーションの困難さがあると考え、その解決のためにビデオ・システムを用いた活動を開始した。具体的には、ICUの学生食堂における放送から始まり、「ソフトミュージアム」構想、さまざまなイベントの網羅的なビデオ記録、三鷹のアパートでのCATV実験である《Cable Paravision Ten》などを行った。その中心にあったのは、コミュニケーションとは何か、いかにそれは可能なのかという問いである。2015年、グループの中心的メンバーであった手塚一郎氏よりビデオ・テープを預託され、整理およびデジタル化を進め、2018年、寄託を機に開設。ビデオ・テープ：

1,176本、企画書などの書類：45件、クリッピング：96件、写真：47件、印刷物：72件、総計：1,436件を所管。現在729本のテープがデジタル化され、閲覧可能となっている。今後さらなるデジタル化と公開に向けた整備を進めたい。[記：久保]



「アーカイヴ——驚異の部屋、あるいは編集の驚異」

山腰 亮介

(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科
博士後期課程)
TEXT: YAMAKOSHI Ryosuke

アーカイヴとの出会いは、驚きの連続だった。私が最初に直接ふれた「アーカイヴ」という名称を冠した施設は慶應義塾大学アート・センター(KUAC)であり、なかでも研究対象の瀧口修造コレクションだった。修士論文執筆のための調査に訪れた際、前室と呼ばれるリサーチまたは整理作業をおこなうスペースや収蔵室に入り、それらの資料体と対面してまず驚いたのは、資料のその膨大な量と内容であった。書簡や貴重な催事印刷物、書籍、草稿、写真などはもちろん、一見するとそれを「資料」と名指してよいのか戸惑うような「石ころ」(瀧口修造「白紙の周辺」『余白に書く』みすず書房、1966年所収)やお菓子の包み紙、たばこの空き箱なども膨大に遺されていた。その驚きは、瀧口によって遺されたことへの驚きであり、綾子夫人やご家族がそれら

を遺そうと尽力したことへの驚きでもあり、そしてそれらを引き受けたKUACがスペースを割いて保存していることへの驚きでもあった。だがいっぽうで、どこか納得する気持ちもあった。『瀧口修造：夢の漂流物』(世田谷美術館／富山県立近代美術館、2005年)をはじめとした文献や「瀧口修造とマルセル・デュシャン」(千葉市美術館、2011年)や「〈遊ぶ〉シュルレアリスム」(2013年)といった展覧会を通じて、瀧口の書斎の写真やかつて書斎にあったオブジェの数々を知っていたこともあり、いまほどはつきりとは自覚的ではないながらも、瀧口という作家にとって「書斎」というものが重要なモチーフであると感じていたからだ。そこにかつてあった「もの」たちの集積がここにある！そのことに強く感動したことはいまも忘れられない。



2015年の1月、ちょうど修士論文を提出した直後に、調査の際にいつも対応してくださっていたKUACの所員である森山緑さんから瀧口修造アーカイヴの資料整理に携わってほしいと連絡がきたときは、ふたつ返事でお受けした。依頼されたのは、書籍、手帖、オブジェ類の整理を進めることだった。オブジェ類とは、私が遺されていることに驚いた「石ころ」やお菓子の包み紙などの、用途不明のもの、あるいは分類の難しいものたちのことである。^{*1}

書籍に関してはそこまで時間もかからずに進めることができたのだが、問題は手帖とオブジェ類だった。多くの書籍にはタイトルや版元、発行年が記されているのに対して、手帖やオブジェ類には決まったタイトルがない。手帖のなかには同じ製品もあって、見ただ目で区別のつかない場合もある。未整理状態、すなわち漠然としたものの集まりはまだ「資料」ではない。番号をつけてそれらを一点一点区別し、捉えていくところから整理は始まる。一点という捉え方自体がまた厄介だ。鉛筆や名刺の束のようにまとまった状態で、一と換算するべきなのか。それとも一本一本、一葉一葉を個別に数えるべきなのか。迷うものにしばしばぶつかった。これらは書籍や「作品」のように綴じられた／閉じられた状態のものとは異なり、アーキヴィストが判断しなければならぬのだ。その判断に基づいたフレームごとに番号を付し、仮の単位を決めることで資料として登録できるようになる。^{*2}

そのような物との出会いから生まれる問いの数々は、これまで考えたことのないことで、驚くことばかりであった。問題に直面したときはその都度に森山さんや、同じく当時所員であったアーキヴィストの上崎千さんに相談し、作業を進めた。手帖に書かれた瀧口の記述を読み、そのなかにある固有名詞や出来事などを頼りにして、瀧口の「自筆年譜」をはじめとした文献とひたすら照らし合わせ、資料の年代を特定・推定していった。当然ながら、手帖にしか書かれていない事実もあり、ここでも驚いたり、納得したり、笑ったり、ちいさな問いを立てたりしながら、なかなか忙しく整理をしていた。

それらの整理を終え、つぎに取りかかったのは、瀧口コレクションの写真の整理であった。この作業にはアーキヴィストであり、現在KUACの所員でもある久保仁志さんが加わった。作業のときに触れた数多くの瀧口修造の書斎写真、そしてそれについて二人で話したことは、後に「影どもの住む部屋——瀧

口修造の書斎」展を企画するときの核となった。^{*3} 現在、瀧口コレクションの写真は、大きくはふたつに分類されている。ひとつは展覧会などの出来事を写した「催事写真」、もうひとつは作品を写した「作品写真」である。このときの作業は「その他」に分類されていた写真を、前述のふたつの分類にわけ、年代、タイトル、撮影場所、被写体(人物・作品など)、撮影者などの情報を対象の写真から可能な限り割り出し、とくに年代に関しては対象となる写真すべてを特定・推定するという方針で進められた。この作業で驚いたことは、写真から前述の情報を取ろうと試みても、かならずしもこれらすべての情報が取れるとは限らないということだ。写真を入れていた袋、写真の裏書きやはし書き、写真のイメージには、イベント名や撮影者の名前などが書いてある場合もあるが、その限りではない。手書きの文字は、判読できるものばかりではなく、また写真のイメージにある文字は、ボケていたり、とても小さい場合もある。写真自体から情報を可能な限り採り終えたあとは、先行研究などの文献に掲載された写真を頼りにし、それらとひたすら見比べ、情報の足がかりを探す。まったく同じイメージがなかったとしても、被写体である人物の服装や場所などを比較してゆくことで、おそらく同日に撮られたであろうことが推定できる場合もある。図録に掲載されている写真であっても、これらの情報は必ずしもすべてが載っているとは限らないことにも驚いた。また、写真とそれに付随する資料から採れる情報が先行研究の情報と異なるときには、作業中である二人の判断で、より蓋然性の高いものを選択する場合もあった。この作業によって(もちろん、あくまでもそれらの記述が正しいという前提の上で)、写真の年代がある程度は特定できた。だが驚いたことに、それでも年代の特定できない写真も数多くあったのだ。そうしたときには、写真の年代をおおよそでも推定していく必要がある。そのときまず採った方法は、被写体となっている作品の制作年をひとつの基準にするという方法であった。たとえば、加納光於と大岡信の共作のオブジェ作品《アララットの船あるいは空の蜜》(1971年)が写っている場合、その写真は1971年以降に撮られたと推定できるだろう。瀧口の書斎写真に写っている「作品」の多くは前述の「瀧口修造：夢の漂流物」に掲載されていたので、これを参考にして作業を進めた。だが、それでもなお年代のわからない写真が残った。これらは、被写体の外見的特徴から年代

を推定するという方法を採用した。たとえば、瀧口修造その人の写っている写真であれば、その容姿や服装の類似から年代を推定するのである。これらの方法を駆使することで、ようやくすべての写真の年代は特定・推定され、いまの状態となった。

これ以降も瀧口コレクションの資料整理は続き、私も携わり続けている。だが、あらたに資料を整理する際や来所した方々からの指摘で、いまだわからなかったことに気づき、いちど整理した資料にフィードバックが必要になることもある。瀧口が書斎で編集が続けたように、アーカイヴの編集作業には終わりが無い。アーカイヴの資料から読み取れる情報は、つねに仮設的であり、蓋然性の高さをもとに判断されたものでしかないからだ。アーカイヴを整理し、構築することは、かつてあった出来事を仮設的に構築し続けることであり、それは思考し続けることでもある。私たちは、まだまださまざまなことに驚くことになるだろう。

(注記)

^{*1} これらのなかには、いわゆる「手づくり本」などの造形作品の準備段階のものが含まれている。詩と批評を横断する瀧口の著作『余白に書く』は、書斎が中心的なモチーフとなっており、絶え間ない制作・編集の場(書斎)はこの書物の成立とも深く関わっている。山腰亮介『『余白に書く』、あるいは一冊の書斎』『余白の部屋(アート・アーカイヴ資料展 XVI「影どもの住む部屋——瀧口修造の書斎」カタログ|KUAS-36)』(慶應義塾大学アート・センター、2018年)を参照。生前に発表した「作品」だけでなく、未発表でありながらも「作品」のように見える「もの」や準備段階のものを遺した瀧口の行為を、作品／準作品／非作品という区分を吊り下げる行為と考えることもできるだろう。

^{*2} アーカイヴのこうした特性については以下を参照。久保仁志「〈半影〉のモンタージュ——アーカイヴの一つのモチーフについて」[「勅使河原宏映画関連資料による「モンタージュとしてのアーカイヴ」研究」のレポート(JSPS科研費 26580029)] 2017年。久保仁志「〈半影〉のカーゴ」同上。

^{*3} 「影どもの住む部屋——瀧口修造の書斎」展は、慶應義塾大学アート・スペースにて2018年1月から3月に開催された。久保仁志さんが企画し、私は特別協力した。この展覧会では、瀧口の書斎写真とともに書斎に呼応する瀧口の著作『余白に書く』とその初出資料群が展示され、展覧会の図録『余白の部屋(アート・アーカイヴ資料展 XVI「影どもの住む部屋——瀧口修造の書斎」カタログ KUAS-36)』(同上)は、展覧会のDM・ポスターとともにいぬのせなか座の山本浩貴+hさんによってデザインされた。アーカイヴの写真整理、とくに瀧口修造の書斎写真についての考察は、同書所収の久保仁志「書斎とアーカイヴ、あるいは「影どもの住む部屋」という一つのサーキットについて」を参照。拙稿はこの論考と久保さんとの対話に多くを負っている。

活動報告

■催事

レクチャー・コンサート「ストラディヴァリウス－ヴァイオリンのマスターピースに触れる」 2018年9月26日(水) 三田キャンパス・北館ホール
300年の歴史を誇るストラディヴァリウスの名器が、「ストラディヴァリウス 300年目のキセキ展」(於：森アーツセンターギャラリー)で開催されるのを機に、ストラディヴァリウスの歴史と所有者や演奏者の来歴に関するレクチャーが行われ、義塾出身のヴァイオリニスト・大江馨氏の演奏による1718年製のストラディヴァリウスと一般のヴァイオリンとの弾き比べが行われた。

平成30年度港区文化プログラム連携事業 都市のカルチュラル・ナラティブ：地域文化資源インターンシップ
本年度はテーマを「地域文化資源インターンシップ」とし、文化が形成、保存、発信される現場では、どのような活動が展開されているか、都市文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を支える人々に出会い、その活動をいわば「インターンシップ」のように経験することで、地域の文化資源について、一歩踏み込んだ知識を得ることを目指した。

- ・慶應義塾の建築プロジェクト 慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード――建築特別公開日
2018年10月17日(水)・20日(土) 三田キャンパス内
慶應義塾大学内で最古の歴史を誇る三田キャンパスにおいて、通常一般公開されていない演説館と旧ノグチ・ルームの内部公開を中心に、慶應義塾大学三田キャンパス内の建築を紹介するマップを手に、自由に巡ってもらった。
- ・大学の建築フォーラム：アーカイヴとアウトリーチ 2018年10月20日(土) 三田キャンパス 西校舎 517番教室
毎年恒例の「慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード：建築特別公開日」と同時開催イベントとして、各大学・アーカイヴの関係者をお招きし、大学における建築物公開について講演いただいた。大学の建築に焦点をあて、国内外の建築資料アーカイヴの活動や、大学における建築物の公開に関する取り組みについて議論を行なった。

研究フォーラム「生成(ジェネティック)するアーカイヴ――創造の軌跡をもとめて」 2018年10月26日(金) 三田キャンパス・東館ホール
アート・アーカイヴ開設20周年「ジェネティック・エンジン・プロジェクト」の一環として、歴史学より柳田利夫氏(慶應義塾大学名誉教授)、文献学より桑川麻里生副所長、美術史学より前田富士男氏(元所長・慶應義塾大学名誉教授・中部大学客員教授)を迎え、本フォーラムを開催した。実際にアーカイヴを構築・発信している立場にある方や研究者、美術館の学芸員など熱心な受講者に恵まれた。

シンポジウム「ジェネティック・エンジン」 2018年11月17日(土) 三田キャンパス・北館ホール
アート・センターのアート・アーカイヴ開設20周年を記念して、シンポジウム「ジェネティック・エンジン」を開催した。アーカイヴをめぐる問題について議論する3つのセッション、会場からの質疑に応じる形での登壇者によるディスカッションが行われた。終盤では御厨貴氏による特別講演が上映され、約4時間にわたる充実したシンポジウムとなった。今年度を通して展開する「ジェネティック・エンジン」と題する周年事業の一環である本シンポジウムは、土方巽アーカイヴの草創期に掲げられた活動理念である「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」にいまいちど立ち返りつつ、この20年間の旺盛な活動を踏まえ、新たな視座のもとでこれからのアート・アーカイヴの在り様を展望する機会となった。

アムバルワリア祭 VIII「西脇順三郎 影響と受容」 2019年1月19日(土) 三田キャンパス・北館ホール
第8回目となる本年度の「アムバルワリア祭」は、新倉俊一氏のイントロダクションで幕を開け、本塾・笠井裕之教授の「センチメンタルな金時計――西脇順三郎とジャン・コクトー」、ケンブリッジ大学・ローザ・ヘンスバーゲン氏の「T. S. Eliot Heard by Nishiwaki Junzaburo: He Do the Different Voices」、関西学院大学・大東和重教授の「古都台南の詩人たち 台湾における西脇詩受容の側面」の講演の後、全員でのディスカッションが行なわれた。また、終盤にはフロアからの鋭いご質問もいただき議論が活発に交わされた。

公開討論 土方巽／アーカイヴ 2019年1月21日(月) 三田キャンパス・東館5階会議室
土方巽の命日1月21日には、これまで8年にわたって「土方巽を語ること」を実施してきたが、本年は、アーカイヴをめぐるの公開討論として開催した。石井満隆コレクションからは石井真理子氏、池宮信夫コレクションからは池宮中夫氏、副島輝人コレクションからは吉増剛造氏に、そしてこれからコレクションの構築をめざす長尾一雄資料からは木部与仁氏に発言していただいた。さらに、池宮信夫資料をベースにしている20世紀舞踊研究会からも発表が行われた。あらためてアーカイヴの意義を見出だすとともに、アーカイヴの展望を切り開くための課題を明らかにする貴重な機会となった。

Seiko presents「油井正一アーカイヴ 拡張するジャズ 研究会」
本年度も株式会社セイコーホールディングスの協賛を得て、公開研究会やレクチャーコンサートを無料で開催している。レギュラー講師の中川ヨウ氏(洗足学園音楽大学)と毎回著名なゲストをお招きし、塾内の大型の会場がほぼ満席になるという大きな反響を得ている。今年度後半に開催した研究会：10月11日(木)「マイケル・ブレッカーを聴く」
※11月30日(金)トーク&音楽「山下洋輔、相倉久人を語る」は登壇者の都合により3月21日(木)に開催が延期となった。

■アート・スペース展示
アート・アーカイヴ資料展 XVIII 土方巽、トリックスター／肉体の叛乱1968―2018 2018年10月1日(月)―11月2日(金)
10年前に「肉体の叛乱」展を開催しているので、今回は資料展示をおさえつつ、「肉体の叛乱」と呼称されるこの公演をめぐる、新たに問いかけ、問いかけられる展示を構想した。「前衛」と「民俗」のダブルバインド状態の1968年の公演を振り返りつつ、公演後は激しい批判を浴びながらも、「肉体の叛乱」としてメディアへの露出が増えたことを紹介した。さらに、「肉体の叛乱」のシュミラークルとしてのチョイ・カファイの舞台の記録映像を上映し、モノクロームの記録映像「肉体の叛乱」に対して、テクノロジーがポップに表象する映像を並行して上映することで、50年後の現在から問いかける試みとした。展示にあわせて、3日間のイベントを旧ノグチ・ルームで開催。

Video Tape File VIC #2 KUAC Cinematheque 2 x『フリーズ・マシーン』1号 2018年10月1日(月)―12月14日(金)
今回は、慶應義塾大学アート・センターの映像シリーズKUAC Cinemathequeの第2回と『フリーズ・マシーン』1号*を組み合わせ、VICの展覧関連テープとVICの活動が分るテープからプログラムを組んだ。ビデオ映像をいかにアーカイヴ化していくのかということと『フリーズ・マシーン』を通して考えた。また、『Para Vision Ten』とビデオ・テクノロジー」と題し、12月14日(金)に手塚二郎氏(VIC代表)、小林はくどう氏(映像作家)、久保仁志(企画者)の3人でトーク・イベントを行った。

平成30年度センチュリー文化財団寄託品展覧会「禅僧の書と書物」 2018年11月12日(月)―12月14日(金)
今年度の展覧会は、①リーフレットをA5からA4へと2倍の大きさの判型に変更して図版および解説の文字を大きくしたこと、②例年30から40点であった出品点数を大幅に増やし64点(他に番外5点)としたこと、③センチュリー文化財団寄託品および財団本体からの借り出し品は全体の3分の1強にとどめ、斯道文庫および図書館貴重書室の蔵書の展示を大幅に増やしたこと、これら3つの点で前年度までとは異なる試みを行った。会期中は、日本文学・日本史・日本美術史・中国文学・日本禅宗史など、関連する研究者にメーリングリスト等を通じた広報を行ったり、知り合いの学芸員・司書の勤務先にDM/ハガキを置かせてもらったことで、多くの観覧があった。

文学部古文書室展 VI 江戸時代の貨幣と人々の暮らし 2019年1月21日(月)―2月8日(金)
展示史料数は、文学部古文書室所蔵文書が例年よりも多い全40点、それに慶應義塾大学三田メディアセンターから拝借した貨幣の実物見本が1ケースであった。一般的に、文書の展示数が多いと、とく「単調である」、あるいは「色彩に乏しい」などの批判が出がちであるが、今回はそのような声はあまり聞かれなかった。見栄えのする実物貨幣が部屋の中央に展示されていたこともあるが、アンケートの感想からも窺えるように、文書の点数の多さがかえって迫力を生み、壮観であったといったような印象を持たれたようである。

■アート・スペース展示 今後の開催予定
『フリーズ・マシーン』2：中嶋興×松澤宥一写真上の部屋 3月25日(月)―5月24日(金)
スタンディング・ポイントII アナ・メンディエタ 3月25日(月)―5月24日(金)
2019年度センチュリー文化財団寄託品展覧会・特殊文庫連携展示『本の虫・本の鬼』 6月3日(月)―6月28日(金)
アート・アーカイヴ資料展XIX 9月9日(月)―11月1日(金)／アート・アーカイヴ資料展XX 12月・1月(予定)

■研究会関連
西脇順三郎研究会
西脇順三郎研究会は、明治学院大学名誉教授・アート・センター訪問所員である新倉俊一氏の主宰で、毎月(原則)第三月曜日に開催されている。本年度は新たな会員も加入し、活動は例年にも増して活発化している。2019年1月19日には恒例の「アムバルワリア祭」の開催にも協力した。同研究会は、詩人、研究者、翻訳家等をメンバーに有し、毎回担当者がテーマを設定して発表を行い、各メンバーとの議論を深める形式をとっている。多角的な切り口をもって、西脇順三郎の詩、詩論等を分析対象とすることで、西脇の詩世界の深奥を探究することを目的として活動している。本年度の後期の研究会は3回行われた。第43回 2018年10月15日 久村亮介氏(東京大学大学院)「西脇詩学における古代の位置づけ」、第44回 2018年11月12日 野村喜和夫氏(詩人)「西脇順三郎とフランスの詩人たち――月光菩薩マラルメ、日光菩薩ランボー」、第45回 2018年3月11日 杉本徹氏(詩人)「西脇順三郎の『詩学』について その2」。

ARTLET 第51号
発行日：2019年3月31日
編集：内藤正人
桑川麻里生
後藤文子
渡部葉子
小菅隼人
徳永聡子
加賀斉天
制作：印象社
発行：慶應義塾大学アート・センター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL：03-5427-1621(直通)
FAX：03-5427-1620
http://www.art-c.keio.ac.jp/
E-mail:ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2019
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンター HPをご覧ください。